

四旬節第4主日

第一朗読 サムエル上 16・1b、6-7、10-13a

第二朗読 エフェソ 5・8-14

福音朗読 ヨハネ 9・1、6-9、13-17、34-38

2023.3.19

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は四旬節第4主日であります。来週もう一回四旬節第5主日があつて、その次の日曜日が聖週間の始まりの枝の主日になりますので、もうすぐご復活が近いという希望のうちにある、そういう時なので、典礼の色は紫でもいいんですけど、今日の第4主日はこのバラ色、「喜べ」っていう、入祭唱にありました「ご復活の恵みが近い」ことを、まだなんだけどでももう恵みが近いっていう希望を表わしています。

四旬節の間は、教会はいろいろな形で回心のうちに過ごすように呼び掛けています。その中でも、例えば、自分に許された楽しみを我慢する、甘いものを我慢するとか、お酒を飲まないとか、それぞれ何らかの実践をされているかたもいらっしゃると思います。

わたくしも何かしているんですけど、大体は四旬節が終わってみると、「ああ、このことを守って節制しようと思ったけど、結局できなかつたなあ」と言って終わってしまうことが多いので、ある年は、何かの本で、自分にとって自分が達成可能な低いゴールを設定して、それを達成していくということも、自分自身を受け入れていくためにとても大切なプロセスなんだというのを読んだか聞いたかしたので、その年はほんとに自分ができる低い目標で四旬節を過ごそうというふうに決めた年がありました。それはどういうことかと言うと、わたしの場合はカレーライスがとっても好きなんです。で、カレーライスを四旬節の間全く食べないっていうのは無理なんです。結局それは、終わってみたら「ああ、結局決めたことを守らなかつたな」ってがっかりして終わるだけです。その中で、いつも行くカレーのお店が、チェーン店ですけども、2軒あります。その2軒には行かない(笑)っていうふうに決めたんです。そうしたら他のお店には行っても良い(笑)ということなんです。そうしたら、普段そこにお店があるなという事は知ってはいたんだけども今まで行ったことがなかつた新しいお店が

ちょうど2軒ありまして、そこに行って、「あ、ここも、今まで素通りしてたけども、おいしいんだな」っていうことを発見したんです。ですから、四旬節が終わったときには、いつも行けるお店が4軒になっていた（笑）。これは、ほんとに低い目標を設定して、だけど4軒になったというのはある意味で四旬節の実りとして神様から頂いたというふうに受け取ることにしたんです。

それは、今までのいつも気に入っている処ばかりに行ったらば、目には入っていたけれども全然そこに行く必要がない、だから「そっちのお店もおいしいのに」っていうのに気が付かないっていうか、知らないで過ごしていたけれども、敢えて、低い目標ですけども、いつも行っている2軒を我慢してみるということで、「もっと他にも美味しい良いお店があるんだよ」っていうことに会うというような一つの、自分がいつも気に入っている、固執している、ある意味で大げさな言い方かもしれませんが自分の手の中にある恵みに固執しているならば、もっと準備されている大きな他の恵みにも出会う機会を流していた。その恵みを、四旬節の場合は敢えて、自分の体験的に何かを我慢してみる、与えられている恵みを一回やめてみるということの中で、他にも新たな恵みに出会うことができるんだということを教えていただいたっていうふうに受け取っているんです。

今のこの例はほんとにささやかなことなんですけども、わたしたちが四旬節の節制として自分が望んでやったことなんですけども、時にはわたしたちが望まないようなときにも神様のほうから、新たな恵みに出会わせるために今までお与えになっていたいろんな状態や恵みから一時的にでもわたしたちを遠ざけられる、そういうこともあるのだ、ということを思い起こします。霊的な暗闇って言ったりします。その状態は敢えて与えられることを通して、今までの状態に留まるのではなくて、神様が準備してくださるもっと他の新しい状態、新しい恵みへと出会うように招かれる、それが神様のなさり方なんだ。それを受け取っていくというのは、ある意味ではとても辛いことである時もある。でもその先に新たな恵みへの出会いがあるというのを、キリスト教では「死と復活」っていうふうに表現します。わたしたちは肉体の命のあとに別の世界があるということだけを言っているのではない。日々の人生のいろいろな経験の中にも死と復活ということは絶えず神様から与えられて来る。それを「いやだ、いやだ」というふうに拒否していれば、そのまま留まる、ということだし、神様が準備されている恵みに目が開かない。

今日の聖書の第一朗読、第二朗読、福音朗読のテーマは、ほんとに見るべきものに目が開かれるという、「視覚的に見ていることではなくて、神様のものの見

方で見ると」っていう、福音ならば、イエスに出会うことを通してそこに目が開かれていくっていうことを表わしています。わたしたちがそれぞれ自分のものの見方の中に固執している間は恵みが見えないのかもしれませんが。

そのように、四旬節、いろんな形で節制を通して改めて、わたしたちが自分の中で完結して満ち足りてしまっている、でもそこに本当はもっと出会わなければいけないいろんな世界、広い世界、あるいは神様が準備してくださっているもっと別な恵みというものがあるのだ、そこに出会うように、という呼び掛けとして、いろいろな出来事を受け取っていくことができているのかな、目を開いているかどうかと言うことを、改めてこの四旬節を通して振り返ってみたいなと思います。

そして、典礼の季節であるならば、あと3週間すればご復活が自動的にやってきます。でも、わたしたちは、一人ひとりの中でその十字架の死と復活というのはもっと時間がかかるかもしれません。「ああ、この恵みに出会うためにこの体験があったのだ」と言える、その時というのは時間がかかるかもしれないし、必ずしも典礼の季節と一致しているわけではありません。でも、年々歳々わたしたちは四旬節と復活祭を過ごすことを通して、一人ひとりの中に与えられる十字架の死と復活の体験を恵みとして受け取って行く、その思いが養われていなければ、四旬節の節制そのものも、ただ何となく一つの年中行事で終わってしまうということかもしれません。

共に過ごしているそれぞれの四旬節の歩みを通して、わたしたちが自分自身の歩み、そして神様との関係を見直しながら、導きに心を開くことができますようにこのごミサを通して恵みを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>